九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明治日本の建築の近代化過程における標準化の一様相 ： 専売制導入時の大蔵技師妻木頼黄による施設計画に着目して

西山，雄大

https://hdl.handle.net/2324/4784389

出版情報：九州大学，2021，博士（工学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏　　名	西山雄大
論　文　名	明治日本の建築の近代化過程における標準化の一様相 ～専売制導入時の大蔵技師妻木頼黄による施設計画に着目して～
論文調査委員	主　査　九州大学　　准教授　末廣香織 副　査　九州大学　　教授　　堀賀貴 副　査　九州大学大学院芸術工学研究院　准教授　井上朝雄 副　査　東北学院大学　　准教授　﨑山俊雄

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文調査の要旨：

本論文は、明治期の日清戦争後に導入された煙草と塩の専売制度の施行を支えた施設群「専売建築」の計画整備を研究対象としている。この「専売建築」は，数か月単位という短工期，地方遠隔地での同時工事，低廉な工費という厳しい制約条件に対して，設計だけでなく施工管理の過程にも「標準化」手法を導入して対応したことを明らかにした。また，これを主導した大蔵省営繕の技師妻木頼黄は，明治期を代表する建築家として知られるが，彼が仮設扱いの短工期の「専売建築」を実現してゆくに当たって，一方では「洋式」意匠の採用といった官庁建築の体裁を重視しながらも，「標準化」という手法を柔軟に用いて現実的に対応してきた過程を明らかにしている。

これまでの明治期の近代建築の歴史は，日本が近代国家を作り上げてゆく過程において，著名な建築家による象徴的な建築を手がけてゆく表舞台から語られることがほとんどだった。しかし，国家の近代化の本質的な意味を考えると，実は産業革命に伴って変革してきた社会システムのあり方こそが重要だとも言える。本研究は，「専売建築」という近代産業と国家の収税システムに直結した建築の設計整備に光を当て，またこうした建築の「標準化」を通じて建築家が国家の近代化に果たした役割を明らかにしており，日本の近代建築研究に新たな視点を付加したと言える。よって，本論文は博士（工学）の学位に値するものと認める。